ルーラ大統領、G7の「ワナ」にはまる

――ウクライナとの首脳会談実現せず

日本経済新聞サンパウロ支局長
宮本英威
みやもと ひでたけ 二〇〇二年慶應義塾大学卒、日本経済新聞社入社。経済部、長野支局、証券部などを経て、二二年四月からサンパウロ支局に五年間勤務。国際部、メキシコシティ支局を経て、二二年一〇月から現職。米ブラウン大、メキシコ国立自治大にも留学。

ブラジルにとって、今回の主要七ヵ国首脳会議（G7広島サミット）はほろ苦い結果となった。ルーラ大統領は米国と中国のどちらにもくみせず、国際社会で独自の中立的な立場を構築して影響力を発揮する外交を狙う。ただ、突然訪日したウクライナのゼレンスキー大統領との首脳会談が実現せず、ウクライナ情勢をめぐって中国やロシア寄りという評判を強調する結果となった。

閉幕翌日の五月二二日朝。ルーラ氏は広島市内のホテルで記者会見に臨んだ。ゼレンスキー氏との首脳会談は二一日午後三時一五分の予定で、ルーラ氏は「待っていた。先方から遅れると連絡があり、（先に）ベトナム（のチン首相）と会った。終わった後も、ウクライナは現れなかった」と説明した。ブラジル側は再度調整に動いたが、ゼレンスキー氏は二一日夜に日本を離れた。

このルーラ氏の会見に先立つ二一日、ゼレンスキー氏は会談が流れた理由を「日程上の都合」と説明し、「彼（ルーラ氏）が失望したと思う」と言及していた。すれ違いの要因は明確ではないが、両国間の距離が鮮明となる結果だった。サミットに参加した新興・途上国「グローバ・ルサウス」の主要国首脳の中で、ゼレンスキー氏と会談しなかったのはルーラ氏だけだった。

ブラジルの有力紙「エスタド・ジ・サンパウロ」は「ルーラ氏はG7のワナにはまった」と分析している。ウクライナ寄りであるG7側は「中立的な立場をとろうとするブラ

ジル、インド、インドネシアに対してきついスカートをはかせた」と言及し、ゼレンスキー氏の突然の来日によって、招待国に「踏み絵」を踏ませようとしたのだと論じた。

ブラジルはロシアによるウクライナ侵攻を明確に「国際法違反」と指摘する。ロシアを非難した二二年三月の国連総会決議に賛成したのはBRICSで唯一だ。経済制裁には不参加だが、中国はもちろん、インドや南アフリカよりもG7に近い。だが、広島ではゼレンスキー氏と会ったインドの方がG7との協調姿勢を目立たせた。ブラジルはG7側にとって「中立ではなく、プーチン大統領に非常に近く見えた」（有力紙「フォリャ・ジ・サンパウロ」）。

国際社会の変容に対応しきれなかった？

ルーラ氏は今年一月から通算三期目となる大統領を務めている。これまで招待国としてG7に六回参加しており、二〇〇八年の北海道洞爺湖でのG8会合にも加わっていた。ブラジル外務省幹部はサミット前、「招待国だけれども、今回広島を訪れる他のリーダーと比較しても、G7の経験は豊富だ。振る舞い方はわかっているはずだ」と述べていた。

だが、ルーラ氏がサミットに最後に参加したのは〇九年だった。当時はロシアもメンバーの一角だった。一四年のクリミア半島への侵攻、米国と中国の貿易戦争の前で、先進国と中国やロシアが同じ土俵で議論する機会は多くあり、そこから国際社会の構図は大きく変わっていった。だがルーラ氏やその側近は「前回大統領を務めた際の感覚から抜け切れていない。中ロへの対抗姿勢で結束が強まるG7内の変化を十分には認識できていなかった」と、日本とブラジルの両国の外交関係者は口をそろえる。

ブラジルが今回得た成果の一つは、日本との首脳会談で、岸田文雄首相がブラジル人旅行者に対してビザ（査証）免除に向けた手続きを始めると表明したことだ。ルーラ政権は相互主義の立場から、ボルソナロ前政権が決めたビザ免除を一〇月から撤廃する方針だが、将来的には日本向けは再度免除となる可能性も出てきた。両国のビジネス関係者や観光業界は歓迎している。

ブラジルは二億一四〇〇万人の人口を抱え、南米では圧倒的な大国だ。一〇の隣国と地政学的に深刻な対立を抱えていないのは大きな強みといえる。二四年には二〇ヵ国・地域（G20）の議長国にもなる。日系人は約二〇〇万人を数え、日本とは伝統的な関係がある。それだけに、緊張感が増す国際情勢の中で、日本がより距離を縮めるべき相手であることは間違いない。●